

入選

ぼくの応援団長、大ちゃん

栃木県
栃木市立国府北小学校 四年

齋藤 黎明

弟の大ちゃんはいつもノー天気な顔していつもぼくのそばにいる。今日も大ちゃんはこの炎天下の中、片道車で二時間もかかるぼくのテニスクラブについてきてくれた。

「暑い。なんかならないの〜」

「のどがかわいた。ジュース〜」

ついでに文句も言っている。夏は暑いし、冬は寒いし、そんなこと二年生になってわかってるんだから、おとなしくおぼあちゃんちで待つていればいいのに。

「ぼくがあーくんを応援すれば、あーくんはもっと強くなるし。」

とかなんとか言って一緒に来るんだ。金色のボンボンまで持つて。ちなみにテニスでは、練習どころか、試合でさえ、は手な応援は禁止なので、今だ、お目見えしたことはない。

でも今さらだけど気付いたんだ。大ちゃんはいつもぼくをはげましてくれてること。ぼく達は取っ組み合いのケンをよくするけれど、大ちゃんはぼくのことをバカにしたことはない気がする。テニスでコーチに注意されることも

たくさんあるから、ぼくのカッコ悪いところを当然見ているはずだし、試合だつてみっともなく負けることもある。でも終わった後、「きつと次はできるよ。」と必ず元氣付けてくれるんだ。大ちゃんから言われると、今できないことが、次は本当にできるようになる気がする。かなりうれしし、自信も安心もまた出てくる一言だ。

ぼくを信じてくれてありがとう。

その、ぼくの応援団長の大ちゃんが、近々入院・手術をすることになった。ナマイキに

「ぼく一人で手術して入院してるから、大丈夫だよ。たまたお見まいに来てくれれば。」

なんて言っている。

お前、何言ってるんだ。しつこいくらい病院に行くから、かくごしとけよ。

手術の日は、ぼくが金色のボンボンを持つて応援に行くからな。きつとうまくいくから安心して大丈夫だぞ。

がんばれよ、大ちゃん。